

17 愛媛県内子町 農村地域における滞在型ツーリズム開発

What▶

観光 # 担い手の発掘 # 集落再生

お話を伺った方々



左から株式会社 石畳つなぐプロジェクト 代表の寶泉 武徳さん、みそぎの里運営協議会 事務局の熊野 円香さん、内子町 五十崎自治センターの稲月 道隆さん、ミカタスイッチ株式会社 代表取締役の納堂 邦弘さん。五十崎自治センター前にて。

地域再生マネージャー

一般社団法人 九州のムラ 代表理事
ようふ のぶお
養父 信夫さん

行政

いかさき
内子町 五十崎自治センター
いなつき みちたか
稲月 道隆さん

民間

株式会社 石畳つなぐプロジェクト 代表
ほうせん たけのり
寶泉 武徳さん
みそぎの里運営協議会 事務局
くまの まどか
熊野 円香さん
ミカタスイッチ株式会社 代表取締役
のうどう くにひろ
納堂 邦弘さん

地域の個性を最大限に伸ばし、「目指す観光地」に

歴史あるまち並みや建造物など豊富な観光資源を持ち、まちづくりの先進地域としても知られる内子町。しかし、まちなかから離れた中山間地域では、観光施策に取り組むも慢性的な人材不足に悩み、魅力の訴求も受け入れ体制も十分とは言えなかった。そこで、近年需要が高まるインバウンドへの訴求も行いながら、地域に滞在し、魅力を知ってもらうための観光プログラム開発に取り組むこととなった。

課題

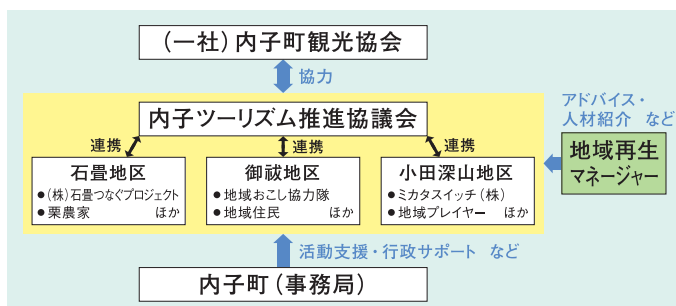
内子町はまちづくりの先進地域として知られ、「八日市・護国の町並み」や国の重要文化財に指定されている「内子座」など、歴史的建造物が多く残る観光地としても名高い。一方で、中山間地域には美しい農村の風景や魅力的な特産品があり、それらを観光資源として生かす取り組みが始まっていたものの、人材や知見の不足もあり、持続可能な仕組みに繋げることができていなかった。その中で、2018年度に外部専門家短期派遣事業を実施。農泊を目玉としたインバウンド向けコンテンツを充実させて滞在時間を延ばし、各地区を周遊しながら内子町ならではの魅力を堪能することができる観光プログラム開発と良質な受け皿づくりの必要性について提言があった。

目的

いしだたみ みそぎ おだみやま
石畳・御祓・小田深山の3地区をモデル地区とし、地域資源を活用した滞在型ツーリズムの開発およびそれらを運営していく組織づくり・人材育成に取り組む。また、観光協会と連携することで観光商品開発や情報発信を効率的に進め、「まちなか」から中山間地域へと人を呼び込む。

地域再生マネージャー事業 実施期間 (2019年度～2020年度)

事業実施体制



2018年度に発足した内子ツーリズム推進協議会を中心に、各地区のプレイヤーや観光協会などと連携しながら事業を推進。地域再生マネージャーの養父 信夫さんは事業全体を統括し、各地区を回って人材発掘・育成のアドバイスや勉強会の開催、必要なノウハウを得るための地域外人材の紹介などを行った。町は内子ツーリズム推進協議会の事務局として携わり、まちなかとの観光連携や各地区のキーパーソンの活動支援、必要に応じて官公庁への事業申請などを行った。

●各地区の課題と現状の整理

What — 何をしたのか？

インバウンド客をメインターゲットとした滞在型の農村ツーリズムの確立という大きな枠組みは決まっていたが、3地区はそれぞれ打ち出すべき個性や現状が異なることから、まずは地域再生マネージャーが各地区を回り、現状把握を行った。

How — どのようにしたのか？

●地域再生マネージャーが各地区を視察し、現状と課題を整理

【石畳地区】すでに観光・交流の拠点として「石畳の宿」があり、運営組織もでき上がっていた。また、町元職員である地域のキーパーソン、寶泉 武徳さんを中心に特産品である栗のブランド化・6次産業化に向けた動きが始まっており、これらをいかに持続可能な仕組みにしていくかが課題となっていた。

【御祓地区】交流拠点として廃校となった旧御祓小学校舎の活用が進んでおり、すでに2年ほど前から地域住民が協力しながらコミュニティスペース「みそぎの里」を運営していた。しかし、思うように利用者数が伸びず、運営メンバーの負担が大きいことも課題となっていた。そこで、新たに地域おこし協力隊として着任した熊野 円香さんが、校舎全体の空き教室の活用促進と「みそぎの里」運営の健全化、ツーリズムとの連携などのミッションに取り組むことに。同時に、熊野さんが地域に根付き、プレイヤーとして自走できるよう育成していく必要があった。

【小田深山地区】小田深山溪谷で宿泊施設の建設計画が進められており、それを活用した滞在型プログラムの開発が検討されていた。しかし、コロナ禍の影響で計画が凍結したことから、今後の観光施策や地域づくりの方向性について、改めて見直す必要が生じていた。地域では、2014年10月に地域おこし協力隊として内子町に移住した納堂 邦弘さんが卒業後に「ミカタスイッチ株式会社」を設立し、町や地域住民と連携しながら地域課題の解決に取り組んできた下地がある。すでに地域が主体となって組織的に動ける関係性が構築されていたため、そのまま納堂さんをキーパーソンとして事業に取り組むこととなった。

●運営組織構築と人材育成

What — 何をしたのか？

すでに納堂さんを中心に組織的な動きができ上がっていた小田深山地区を除く2地区で、プロジェクトの属人化を防ぎ、限られた人員の中で持続可能な地域づくりを推進していくため、地域住民主体の運営組織を構築。また、地域おこし協力隊制度などを活用しながらプレイヤーの確保に努め、自走に向けた育成を行った。

How — どのようにしたのか？

●運営組織構築・体制強化

【石畳地区】以前から若手を中心に地域経営会議を開き、地域づくりの方針を討議する場が設けられていた。その会議体をベースに、栗の6次産業化とツアー運営を行う法人「株式会社石畳つなぐプロジェクト」を2020年2月に設立。また、拠点となる「石畳の宿」の運営組織はすでにでき上がっていたが、宿の業務は地域の“おばちゃん”頼みとなっており、食事メニューのマンネリ化や運営メンバーの高齢化による個人の負担増などの問題が浮上していた。そこで事業を安定的に継続させるため、2019年度に運営組織を法人化。新たにスタッフ2人を追加し、運営体制を強化した。

【御祓地区】旧御祓小学校の利活用や体験プログラムの企画・運営をはじめとした地域づくり全般を地域住民たちの手で進めていくにあたり、「みそぎの里運営協議会」を組織することとなった。

「地区内では取り組みに否定的ではないものの、参加への積極性には温度差がありました。協議会発足の前に準備会を行い、宮崎県高千穂町^{たかちほうちょう}で持続可能な村づくりに取り組む飯干 淳志さん^{いひほし あつし}に講師としてお越しいただいたのですが、すでに多くの場所で地域づくりの実績がある外部の方から意見をいただいたことで、地域の人たちの意識が変わっていくのを感じました。地域住民が一堂に会する場で事業の方向性を共有できたことは、その後の活動をスムーズに進める上で必要なことだったと思います」(熊野さん)

●地域外の専門家からノウハウを学ぶ

地域再生マネージャーが主導し、取り組みを推進するために必要な地域外の専門家を招聘。中山間地域における地域づくりで実績を持つ人材をはじめ、農泊や宿、伝統文化と観光、サイクルツーリズムなど多彩な専門家を地域と繋げ、実運営に必要なノウハウ提供や勉強会の機会を積極的に設けた。

●各地区の魅力を生かした特産品・観光商品開発とプロモーション

What—何をしたのか？

それぞれの地区で地域資源を活用した観光プログラムの開発や特産品開発に着手。すでに交流拠点を持つ石畳地区や御祓地区では、改めて提供する食の見直しも行い、拠点の魅力向上に努めた。

How—どのようにしたのか？

●滞在型ツアー商品の開発・交流拠点のブラッシュアップ

【石畳地区】宿泊施設「石畳の宿」の朝食メニューの見直しを実施。山菜や川魚など地域で日頃から食べられている食材を使うだけでなく、囲炉裏を使って宿泊客の目の前で炭火焼きを提供するなど、地域色豊かな朝食を提供することとなった。

「宿は“地域のおばちゃん”がお世話をしてくれているのですが、献立のバリエーションが少なく、連泊で同じメニューを提供せざるを得ないこともありました。せっかく囲炉裏があるのだから、それを使わないともったいないと養父さんからもアドバイスをいただき、メニュー開発に取り組みました」（寶泉さん）

また、観光協会と連携して里山の風景を感じられるインバウンド客向けのガイド付きウォーキングツアーなども企画・実施した。

【御祓地区】地区内にある紅葉ヶ滝で滝打たれ体験を行う滝行ツアーを企画し、2020年度からツアー実施。

「養父さんから、せっかく“御祓”という特徴的な地名があり、滝行にぴったりの滝もあるのだから、それを生かしたプログラムを開発してはどうかとご提案いただきました。本格的な“行”よりは、カジュアルにアクティビティとして体験いただけるように、ガイドは地域の女性が務め、装束の貸し出しやバスタオルの提供なども行っています」（熊野さん）

また、「みそぎの里」のメニュー見直しを行い、より地域らしい食材や献立を考案。地元の米「御祓米」も積極的に打ち出した。

【小田深山地区】納堂さんが中心となり、地域住民や事業者らとアイデアを出し合いながら、自然と体験を絡めたプログラムを複数考案した。

「当時はコロナ禍ではありましたが、むしろアウトドアブームなどもあり、この地区には結構人が来ていたんです。そこで、町と連携してキャンプ場をオープンしたりという動きもありました。ツアープログラムとしては、サイクリングで地区を回る企画や、渓谷でのヨガ体験・サウナ体験などは事業実施期間中から始まり、現在も続いている人気の企画です。ここで行うプログラムは必ず、地域の食である“たらいうどん”をランチとして組み込んでいて、好評をいただいています」（納堂さん）

3地区ともモニターツアーでガイド人材の育成やプログラムのブラッシュアップを重ね、精度を高めてから本格的な販売を開始した。また、観光協会がこれらの情報発信を積極的に行い、内子町で体験を探している人や、まちなか観光に来た人の次の目的地として案内を実施。誘客へと結び付いた。

●6次産業化を目指し、資金調達を実施

石畳地区では特産品である栗を使った商品開発に着手。「石畳栗」は大粒で糖度が高いことで知られ、独自のバランス農法を取り入れて生産性を高めている。手間はかかるがその分希少性の高さも魅力となっており、商品開発の資金調達にあたってクラウドファンディングを活用した際には大きな反響があった。

主な成果

●安定した運営体制を確立

【石畳地区】栗の6次産業化と宿を拠点としたツーリズムを展開する株式会社石畳つなぐプロジェクトを2020年2月に設立。寶泉さんが代表となり、商品開発や販路開拓、ツアー運営などの取り組みを牽引している。

【御祓地区】2021年4月にみそぎの里運営協議会が発足。旧御祓小学校の活用やツアー運営について地域住民で話し合いながら進めており、意思疎通と協力関係構築の場としての役割も果たしている。

【小田深山地区】納堂さんが代表を務めるミカタスイッチ株式会社がすでに地域内で活発に活動をしてきたこともあり、取り組みを進めるにあたっての地域や町との連携をスムーズに進めることができた。

「専門の組織や団体があるわけではないので、協業は必須です。地域のプレイヤーもやる気のある人が多く集まってくれているので、継続できています」（納堂さん）

●クラウドファンディングで商品開発の資金を調達

株式会社石畳つなぐプロジェクトが行ったクラウドファンディングでは無事に目標金額を達成し、最終的に1,000万円の資金を調達。新たな商品開発や販路開拓に向けて弾みをつけた。また、石畳地区を地域外の人にPRする機会にもなり、そこから継続的にプロジェクトを応援してくれる人や、実際に地域に興味をもって訪れる人なども現れている。

●ツアー商品の定番化

【石畳地区】「石畳の宿」の魅力向上により、滞在を前提としたプログラムの開発が進んだ。農業体験や田舎暮らし体験、地元ガイドによる集落案内などのコンテンツが定着している。

【御祓地区】滝行ツアーが集客の目玉に。実施初年度はシーズンを通じて30人ほどの参加があった。

【小田深山地区】小田深山渓谷での体験メニューが充実。特にヨガやサウナ体験を絡めたプログラムが参加者から高い満足度を得て定番化が決定した。

地域再生マネージャーコメント



PROFILE

1962年生まれ。1992年に独立し、グリーンツーリズムの普及を目的とした雑誌「九州のムラ」を創刊。以来、民間企業との協働プロジェクトを多数手がける。

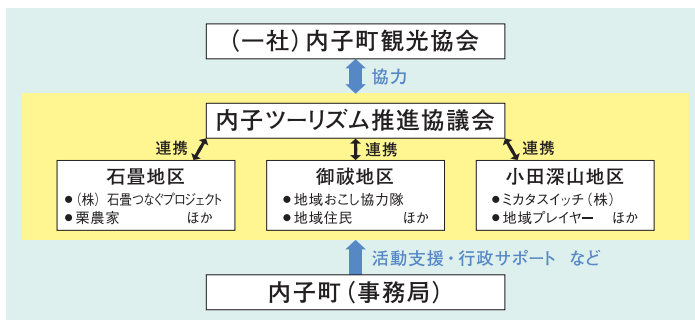
一般社団法人九州のムラ 代表理事 養父 信夫さん

無理をせず、内子は内子の戦い方を

内子町とは2018年度に行った外部専門家短期派遣事業からのお付き合いですが、そのきっかけとなったのは、農業新聞にインバウンドと農泊に関する提言を取り上げていただいたことでした。内子町は地域づくりの先進地域として知られており、僕にとっては憧れの場所。とてもうれしかったことを覚えています。事業のモデル地区となった石畳・御祓・小田深山は、地域の個性も取り組みの度合いもまったく異なり、状況が違う中でのスタートとなりました。そこで初年度にまず取り組んだのが、魅力あるコンテンツづくりと地域を繋ぐ交通アクセスです。コンテンツとしては体験プログラムづくり、アクセスとしてはサイクリングに着目して検討を進めました。形になったものもあれば、最後まで力が及ばなかったこともあります。僕の地域再生マネージャーとしての役割は「繋ぐこと」。地域の人と人、地域と地域外の人、地域と官公庁の事業、この3つを取り組みに応じて適切に繋ぐことができたのではないかと考えています。内子町は町の方のやる気や熱意が非常に高く、地域には地域の戦い方があることを理解して、まちづくりを進めてきた実績もあります。その考え方を農村まで広げ、地域が無理をすることのない良質なコンテンツづくり・地域づくりを進めていただければと思います。

地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2021年度以降)

事業実施体制



各地区のプレイヤーが地域住民・事業者らと連携しながら取り組みを推進。町は引き続き事務局として各地域の活動を支援。必要に応じて官公庁への事業申請を実施するなど地域の取り組みの進度に合わせて行政面からの協力を行っている。

事業実施内容

●各地区ごとに個性を生かした取り組みを展開

What — 何をしたのか？

各地域のプレイヤーがそれぞれ地区に合った形で地域づくりを継続。地区間やまちなかとの連携は、移動距離や宿泊施設などの課題が多くあまり進んではないが、それぞれの地区が「内子町での滞在時間を延ばす」ことを共通認識として取り組みを続けている。

How — どのようにしたのか？

●栗を中心とした商品開発と地域づくり(石畳地区)

事業実施期間中に設立した株式会社石畳つなぐプロジェクトが中心となり、「石畳栗」のブランド化や商品開発、販路拡大に注力。松山市でスイーツ事業を展開する有限会社ラポールとスイーツ開発に取り組んだほか、「石畳の宿」では収穫期に合わせて栗を使ったメニューを提供し、好評を得ている。また、地元の若手栗農家7人を「7人の侍」に見立てたストーリー発信や、観光プログラムに栗林のある風景を取り入れたりと、特産品と地域の魅力を絡めた施策を積極的に展開している。

●地域住民が主役の地域づくりが進む(御祓地区)

主要な観光コンテンツとして滝行ツアーを継続している。6月下旬から10月上旬頃までを開催シーズンとし、週3、4日開催。地域住民が協力し合いながら運営を行っている。

また、旧御祓小学校では「みそぎの里」利用者数が順調に推移。地域の女性たちが中心となって運営にあたっている。空き教室の活用も進んでおり、チャレンジショップのように若者が気軽に事業をスタートできる場所になっている。

●自然資源を活用したインバウンド客向けツーリズムの強化（小田深山地区）

ヨガやサウナなど、事業実施期間中に立ち上がった体験メニューを継続。当初は県内容をターゲットとした1泊2日のプログラムが中心だったが、最近は長期滞在のインバウンド客を視野に入れ、宿泊日数を増やしたりトリートプランなども提供している。また小田深山地区には「SOL-FA 小田スキーグレンデ」があるが、シーズン外の施設活用としてアウトドアイベントやネイチャー体験などを行っている。その他、情報発信でもインバウンド対策を強化しており、ウェブや英語に精通する人材が活躍している。「Airbnb や Booking.com の影響力が大きいので、特に力を入れて英語で情報発信を行っています。ある宿のオーナーが英語が堪能で、かつ Airbnb のスーパーホスト（サイト内で優良なホストに与えられる称号。スーパーホストの経営する宿や発信する情報は信頼性が高いと判断される）にもなっているの、小田深山の情報を積極的に発信してもらっています」（納堂さん）

主な成果

●栗を使ったスイーツの商品化と販路拡大（石畳地区）

クラウドファンディングの返礼品として、有限会社ラポールの協力のもと、「完熟石畳栗ジェラート」が完成。好評を受けて2021年度には2回目のクラウドファンディングを実施し、「完熟石畳栗パウンドケーキ」を返礼品として開発した。また、主要な販路のひとつである卸事業については、内子町に新たに完成する工場との契約が成立し、まとまった数を定期的に出荷できる取引先を確保できた。

●地域住民主体の持続可能な運営を実現（御祓地区）

滝行ツアーは初年度の30人から毎年参加者が倍増し、2024年度は177人まで増加。2025年度は8月時点ですでにそのペースを超えたようだ。

「県が主催する南予キャンペーンの対象となり、大手旅行サイトに情報を掲載できたことも成果に繋がっています」（稲月さん）
また、校舎の空き教室は若手事業者がアトリエとして利用したり、二拠点居住を行う美容師が月に数日だけ営業を行うなど個性的な人々が集まりはじめ、12事業者が入居している。

これらの取り組みすべてを、熊野さんが中心となって地域住民を巻き込みながら運営。特に女性が積極的に関わる機会が増え、地域内の交流も活発化した。

「地域住民同士の交流の機会って、意外と少ないんですよ。でも、活動を通じて顔を合わせる機会が増え、今ではこれを楽しみにしているという声もよくいただきます。今の課題は宿がないこと。泊まりがけで地域の人と触れ合っていただく機会を増やすことが、御祓を知ってもらうために一番必要なことだと思います。今、ちょうど宿をやりたいという方も出てきているので、その方も巻き込みつつ、地区のアイデンティティーである田んぼの景色を楽しんでもらいながら、ゆっくりと地域に滞在してもらえれば仕掛けができればいいですね」（熊野さん）

●新たな観光拠点を整備（小田深山地区）

観光客受け入れ体制を充実させるための拠点整備が本格的に始動。まずはミカタスイッチ株式会社が運営に関わる道の駅が改修に向けて動き出した。同施設では“たらいうどん”を提供し、ペットと一緒に楽しめる施設として近年人気が高まっていたが、施設の老朽化や厨房のキャパシティの問題で十分な受け入れ体制にあるとは言えなかった。今後は全館バリアフリー対応を行い、厨房や飲食スペースも拡大するようだ。また、自然体験プログラムの拠点を小田深山溪谷近くに設置するプロジェクトもスタート。インフォメーションセンター、シャワー、カフェなどが入居する予定とのこと。その他にも、納堂さんが空き家を改修した一棟貸しの宿をオープン。こちらもインバウンド客をメインターゲットとした仕掛けを行っている。積極的な情報発信を継続していることもあり、月平均100人程度の宿泊客のうち、約5割がインバウンド客だという。

「日本人はどうしてもせわしない旅程になりがちですが、海外、特に欧米からのお客様は長期間滞在し、自分の時間をゆったりと過ごすことを楽しむ文化があります。ここは電波も入りづらい場所ですが、逆にそれがいいという方もいる。自然の中で過ごすことを目的とした方にお越しいただけるような訴求をしていければと考えています」（納堂さん）

自治体コメント



内子町 五十崎自治センター 稲月 道隆さん

●今後は内子町全体にツーリズムの波を

事業実施期間中は各地域の受け皿となる組織のツーリズムに対する研鑽が図られたことで、石畳地区では地域協議会の法人化による栗のブランド化事業、小田深山地区では体験観光の充実、御祓地区では女性活動の活発化や体験プログラム販売などの成果を得ることができました。事業終了後も各地域が取り組みを続け、発展を見せています。規模は小さいながらも地域運営やツーリズムの受け皿となる組織・人材は明確になったので、今あるものを繋いで新しい内子町の観光交流を町全体で共有していければと考えています。

取り組みのプロセス

実施前

2018年度に外部専門家短期派遣事業を実施。町では「町並みから村並み、そして山並みへ」を掲げて景観保全と文化振興によるまちづくりを農村部まで拡大させているが、慢性的な担い手不足に悩み、農泊やインバウンドを視野に入れた今後の展開に向けての助言が求められていた。それに対し、地域再生マネージャーの養父 信夫さんは地域おこし協力隊を活用した外部人材の活用や質の高い受け皿づくり、町の持つ強みを「物語」として発信する必要性を示した。



マネージャー事業実施期間中

1年目(2019年度)

地域再生マネージャーが各地区を回って課題と現状を把握。状況に合わせてそれぞれアドバイスを行い、ツーリズムの受け皿となる人材育成や拠点のブラッシュアップを進めながら、体験プログラムづくりを行った。

事業全体を統括し、プロジェクトの進捗管理や各地区のキーパーソンの活動支援、情報発信機会の提供などを行った。

観光ツアー商品の開発に向けて地域資源の見直しや運営ノウハウを蓄積。また、今ある拠点の食の見直しを行い、魅力向上に努めた。

- 現状把握と地域資源の分析・検証を行い、それぞれの地域が打ち出すべき個性、方向性が定まった。
- 専門家からアドバイスを受け、考え方や運営のノウハウを得た。

- さまざまなジャンルから広く専門家を招聘し、3地区の取り組みに対する適切な指導、ノウハウを得ることができた。
- 地域における「箱物依存」「行政依存」に対し、町が強い課題意識をもって事業に臨んだ。

2年目(2020年度)

各地域の魅力を活用した体験プログラム、拠点活用、産品開発などを推進。モニターツアーを実施して体験プログラムのブラッシュアップと運営ノウハウを蓄積した。また、地域住民主体の運営組織の構築を目指した。

事務局として事業を統括。前年度に引き続き、地域プレイヤーの活動を支援しながら各地区の取り組みの進捗管理や情報発信機会の提供などを行った。

持続可能な運営を目指し、組織を法人化。また、モニターツアーを積極的に開催し、商品のブラッシュアップを行った。

- クラウドファンディングで多くの開発資金を集めることに成功(石畳地区)、滝行ツアーの企画と実施、地元の米を「御祓米」として販売(御祓地区)、渓谷でのヨガ体験・サウナ体験プログラムが完成(小田深山地区)など、3地区ともに地域づくりの発展に繋がる成果を挙げた。
- 地域再生マネージャーによる講義、ガイド人材の育成などを経て、翌年度以降の展開を期待できるプログラムが充実した。

- 地域住民主体の運営組織を構築したことで、地域が一丸となって取り組む意識が生まれた。
- 地域プレイヤーの活動がスムーズに進むよう、町と地域再生マネージャーがきめ細かく支援を行った。

マネージャー事業終了後

3年目(2021年度)

前年に行ったモニターツアーを経て、体験プログラムや産品販売を本格的に始動。滞在型ツーリズムの確立に向けて、地域プレイヤー主導のもとで取り組みを発展させていくことを目指した。

引き続き事業全体を統括する事務局として、地域プレイヤーの活動支援を継続。必要に応じて官公庁への事業申請なども行い、協力しながら取り組みを進めた。

事業実施期間中に立ち上がった企画をブラッシュアップしながら継続。地域住民が主体となり、自走を開始した。

宿の朝食が看板メニューとして定着。松山市の企業と共同でスイーツを開発した。(石畳地区)滝行ツアーの参加者が前年から倍増。リニューアルした「みそぎの里」も好調で、空き教室の活用も進んだ。(御祓地区)ヨガやサウナなどのコンテンツが定番化。スキー場やキャンプ場と連携した取り組みも始まっている。(小田深山地区)

- モニターツアーで精度を高めたことで、参加者の満足度向上に繋がった。
- 事業実施期間中に運営組織を確立し、自走できる体制を整えていた。

4年目(2022年度)以降

「滞在時間を延ばす」を共通認識とし、各地区がそれぞれの取り組みを展開。インバウンドも視野に入れながら地域住民主体の持続可能な運営を行い、最終的には町全体を巻き込んだツーリズムの完成を目指す。

各地区の取り組み状況を把握し、プレイヤーの活動を支援。地域おこし協力隊制度を活用した担い手確保、ハード整備のための事業申請なども必要に応じて行っている。

石畳地区では特産品を通じた地域の魅力発信、御祓地区では空き教室活用と体験プログラム、小田深山地区ではインバウンドを意識した受け皿づくりや情報発信に注力している。

- いずれの地区でも体験プログラムが安定した集客を実現し、新たなプログラムづくりも進められている。
- 地域住民が主体的に動き、地域ぐるみで取り組みを盛り上げようとする意識が生まれている。

- 各地区がそれぞれに取り組みを進めているが、「滞在時間を延ばす」という目的を共有している。
- 各地区のプレイヤーが地域住民を積極的に巻き込みながら取り組みを発展させている。

2024年度までの実績

石畳地区では地域ガイドツアーを休止しているが、「石畳の宿」の宿泊者数は362人(2024年度合計)と2022年度の334人から増加。また、「石畳栗」の出荷量は993kg、出荷額350万3,000円となっている。御祓地区では、滝行ツアーの参加者は177人(2023年度は136人)。「みそぎの里」利用者は2022年度875人から2024年度は942人と増加した。小田深山地区では移動式ヒノキ風呂・足湯体験や自然学習体験など3種類の体験ツアーを合計9回実施。合計225人が参加した。インバウンド客に向けた積極的な情報発信を行ったこともあり、納堂さんが経営するゲストハウス「深山山荘 DENCHI」では月平均100人程度の宿泊客のうち、約5割がインバウンド客となっている。内子町全体でも2022年度の331人から2023年度は1万3,619人、2024年度は4万1,457人と大幅にインバウンド客数が増加しており、今後は各地区の体験プログラムへの流入にも力を入れていく。